

## りびんぐらいぶず 平成29(2017)年1月第1号

### 信前及び生因願以外についての吟味

#### ご讃題

「眞実功德と申すは名号なり。一実真如の妙理、円満せるがゆゑに、大宝海にたとへたまふなり。一実真如と申すは無上大涅槃なり。涅槃すなはち法性なり、法性すなはち如来なり。宝海と申すは、」よろづの衆生をきはらず、さはりなく、へだてず、みちびきたまふを、大海の水のへだてなきにたとへたまへるなり。この一如宝海よりかたちをあらはして、法蔵菩薩となのりたまひて、無礙のちかひをおこしたまふをたねとして、阿弥陀仏となりたまふがゆゑに、報身如来と申すなり。これを尽十方無礙光仏となづけたまつるなり。この如来を、南無不可思議光仏とも申すなり。この如来を、方便法身とは申すなり。方便と申すは、かたちをあらはし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふを申すなり。すなはち阿弥陀仏なり」と仰せである。

(Ref『一念多念文意』「第十八条」註釈版聖典P690～691)

#### 信前及び生因願以外についての吟味

本願寺派では、三業惑乱(さんごうわくらん)に端を發する二百年來の能行所行論争は、“能所不二溶融無礙(のうしょふにようゆうむげ)の法体大行(ほつたいだいぎょう)”説に落ち着いたが、その事態は、信心獲得時点に関わる。

では、これは未信の行者には与り知らぬ事態とすべきであろうか。

所行学派の根拠とした法体大行(名号)は、宗祖が眞実功德と申すは名号なり(ご讃題)と仰せ下さった法性法身に当たると窺われる。

これはおさとのり世界からの法の働きであり、衆生の状態によらない。

大行とこれを称しても衆生の側から触ることさえできない。

もともと「法界身は一切衆生の心想のうちに入りたまふ」(Ref『仏説觀無量壽經』「像觀」)のであるから、未信の行者もその働きのうちにあると見ることができたのだ。

だとすれば、法体大行は、未信の行者にも働き続けて居て下さったのだと改めて頂戴し直せばよいことになる。

実は、“法体名号”という用語自体は、宗祖の用法ではなく、大行出体積(行の巻)とも異なる。

出体積は、“大行とは即ち無礙光如来の名を称する”であるから、衆生の上に本願力回向された如来様の行であった。

回施された衆生は、これを受け止めて称えれば、衆生の上でただちに大行が法として働き出して下さる。

“大行”という法ならば、その働きは、衆生の状態には依る筈もないから、「如来様から賜った如来様の行を私の上で行じさせて戴くのですよ」とお取次ぎし、行ずる行いは未信の行者にも開かれていたとしてなんら差し支えがない。

結局、能行所行何れも信前にも開かれた概念だったと捉え直すことができるかと窺う。

次に、生因願以外の願については、どのように捉えることができるであろうか。

宗祖は、「願力を聞くによりて報土の真因決定する」と仰せであった（六字釈）から、願力は、狭義には名号による生因に関わり、広義には四十八願成就に関わると窺われる。

### 具体的事例を顧みる

そこで、以下、具体的事例を顧みる。

『本願寺白熱教室』の「教えを床の間に飾っておいてよいのか」は、異色の輝きを放っていた。仏法に全く不安内で京女に入学した学生達に知識として教えたはずの素朴なご本願（第三願の悉皆金色の願、及び第四願の無有好醜の願）が彼女らの人生の瀬戸際に畢竟依となって姿を現すことが少なくないというお話である。

これは伝統的な安心の要を全く知らない者にも阿弥陀仏の大悲は浸透する証左になるとご指摘だったからである（Ref 徳永一道『本願寺白熱教室』「教えを床の間に飾っておいてよいのか」）。

瓜生 崇氏の父親との別れの物語は切実だった。

末期癌の床に横たわった父親を毎週末に訪ねると、父は私の手をギュッと握って「わしの人生はつまらん人生だった」とボロボロと涙を流し「帰らんでくれ」と懇願した。

自身は、次の日の勤めのためにはその父の手を振り解いて帰宅せねばならなかったと吐露し（瓜生 崇 サンガ伝道叢書2『さよなら親鸞会 脱会から再び念仏に出会うまで』P40～44）。

「衆生は、名号の働きの中で苦悩し、終にお救いに与らずばなんとしよう」という趣旨の御法話を氏は嘗まれたかと窺う。

小児（しょうに）往生、またしかりである。

蓋し、未信の衆生が願力の働きに遇えないとしたら、衆生の状態で法の働きを付度して不遜である。この難題は、「時間論」によって如来様のお手許では既に解決済みではないかと筆者には窺われる。

これらが物語るところは、伝道教学としては浄土往生の生因（しょういん）たる安心の要（あんじんのかなめ）だけを説いて終れりとしては不親切だということである。

大阿弥陀経では、蝸飛蠕動（けんびねんどう、飛び虫、這う虫）の類も聞名に与る。

してみれば、寧ろ、苦悩の衆生の現実に「回向される本願力」は働き続けて居るとご案内せねばなるまい。

山岡誓源氏の『6 Aspects（六位相）』も、カウンセリングの現実体験に立脚していた。

カトリックには、「フットプリント（足跡Foot Prints）」という逸話がある。男が今わの際に夢の

中で大空を見上げると人生の足跡が大空に映し出された。  
篤信の男の人生の足跡はずっと二列だった。一つは男の、今一つは神の。彼の人生はずっと神と一緒にだった。その筈だった。  
でもよく見ると、所々で足跡は一列になっていた。  
思い返せばそれは彼の人生の苦節の時だった。思わず、彼は吐露した。  
「さては、わが苦節のとき、神は私を見捨て給うておられたか」と。  
神はお応えになった。「そうではない、そのとき私はお前を背負っていたのだ」と、  
男は今更ながらに神の愛に驚き、自らに恥じ入った。  
浄土真宗的に云えば、自力の行者に既にして他力は働き詰めだったことを物語る。  
同様な趣旨について『仏説無量寿経』には「群生を荷負して之を重担と為す」という御文がある(Ref証信序、註釈版聖典P7)。  
実は、お名号自体が、阿弥陀仏が私を背負って立たれるお姿だったのだ。  
「“尊号”と申すは南無阿弥陀佛なり」と仰せだったからである。  
“南無”とは、如来様の帰せよの命の発せられるお救いのお目当て(私)に他ならなかったからである。合掌。

正覚寺仏教壮年会總會	一月二十二日十八時より
正覚寺役員会	一月二十二日十九時より
正覚寺仏教婦人会總會(新年会)	一月十六日(月)一三時より
正覚寺初講	一月二十九日(日)午前十時より
著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地	
077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥	